

## 日光貝類採集記

黒田徳米

結構莊麗な東照宮、二荒山神社等を始めとし、濃藍の水を湛へる中禪寺湖、大小有名なる飛瀑、温泉、森林等山と水とに豊かな恩恵を有つ日光は古來内外人の間に餘りによく知られ盡し、四季を通じて爰に杖を曳くものが絶えなればかりでなく、避暑地として殊に外國人の間に此の地に夏を過すもの甚だ多かつたために日光の陸産貝類については明治の初年以來既に數回に亘つて報告せられて居るのを見る。然るに何故か邦人によつて陸産貝類が顧みられたことを殆んど聞かないのは不思議の一である。最近東照宮の學術的調査が計畫せられて各種の生物調査が行はれたのに附隨して該地の貝類調査が岡田彌一郎教授によつて實行せられたことは雜誌ヅキナ

ス第四卷第六號に報告せられんとして居る。私も多年此の地の實地採集を試みたいと願つて居たが好機を得るに至らなかつた。特に故平瀨與一郎先生の全國に亘る採集事業からも何故ともなく未遂行のまゝに残されて居たのでその缺を補ふ必要からも是非その機會を得たいと切願して居た。殊にまた上記の如く外國人によつて既に多數の種類が報告せられて居るにも拘はらず從來他の地方からもそれ等に同定せらるべきものが餘り多く發見せられず未詳のまゝに残されて居るのは、よく例にある極めて『局限せられたる分布』を有する特産種であるためか或はまた原記載の上に不備な點があつてその後既に發見せられて居ながら別種と考へられて叩るた

めか、兎も角それ等の内容を明かにせざる限り接壤地方産の貝類研究上に多大の不便を感ずることであるから此の地の實地採集は極めて急務であることを話した所が中村新太郎先生は非常な御厚意を表はされ、一昨年はシモダマイマイの再発見のため伊豆下田へ旅行する便宜を與へられたのに引き續き昨年夏は日光採集の企を實行し得る機會と便宜とを與へられた。然るに實地採集の結果は殘念にも岡田教授も述べて居られる如くに餘り豊富な成績を擧げ能はなかつた。斯くて私共は更に他の適當な機會を待つて充分な調査を行ひ以つて總括的記述を行ひ得るものと思つて居たのであるが、恰も本年秋期には陸軍特別大演習が北關東の平野に於いて執り行はせられるため、地方當局は例によつてその地方の博物調査を開始して居るとの噂を聞くにつけ、此際日光の貝類についても私の知り得ただけを述べて置くことはそれ等の事業に當られる方々のためにも多少の參考となり得ようかと

とりあへず筆を執つた次第である。爰にその事情を述べて中村先生の御厚意に對し深甚なる感謝の意を表するものである。

日光産貝類採集の歴史 文獻上多少の缺陷を有するためその歴史を完全に述べる事が出来ない憾みはあるが、私の知り得た日光産貝類に關する記録は次の如くである。

1. E. von Martens は一八七七年四月出版の *Sitzungsberichte d. Ges. naturf. Freunde Berlin* に於て W. Dönitz, Fr. Hilgendorf 兩氏が一八七三年—七五年に亘つて東京・箱根・上總鹿野山・房州・高倉山・秩父武甲山・函館・山陰等各地から採集したものにつき報告して居る。その中に日光の貝類として 1. *Philomycus bimaculatus*; 2. *Helix nimbosa*; 3. *Clausilia proba* の三種を擧げて居るが、その第一はナメクジ、第二は和名トラマイマイと稱するもので箱根山を原産地とするが日光の標本は三〇×一八ミメと云ふ小形であると記して居る所から見

るとその同定は誤つて居て、恐らく今日私共がヒタチマイマイと云つて居る貝即ち *Euhadra brendti* (Kobelt) のことであらう。此の種は北は陸奥から西は佐渡・越後に及び南は常陸に亘る廣い區域に分布するものである。第三の *Clausilia proba* は A. Adams の命名で紀伊大島 (Kino-Osima) から記載せられたもので今尙ほ未詳の一種である。然るに後の學者が斯く命ずる貝は眞實アダムスの種類ではなくナニヒギセル *Euphaedusa tau* (Boettger) を誤り同定したものであるとは H. A. Pilsbry 氏の指摘する所である。次は

二、Reinhardt によつて同誌上三一八頁に前記兩氏採集にかゝるヘツカンマイマイ類の諸種を研究報告して居る、その中に日光産としては *Hyalina sinapidium* と云ふ新種がある。之は即ち和名ヒメヘツカンと呼ばれ *Discocornulus* に屬するものである。その次は

三、當時香港に於ける獨逸副領事であつた

O. F. von Möllendorff によつて述べられたキセルガヒ類の報文である。そして實は私が特に日光採集に重點を置いたのも云はゞ此の類に外ならなかつた。之れは軍醫 R. Hungerford が一八八一年本邦各地に於いて採集した材料の中キセルガヒ類のみを記録したもので、奈良春日産のキセルガヒ類については既に本誌第一五卷一二九—一三四頁に於いて御紹介した所である。Möllendorff の記載は *Journal of Asiatic Soc. Bengal* 第五一卷第二部第一號 (一八八二年七月) に日光産として下記のキセルガヒが擧げられて居る。

1. *Clausilia digonopyga* Böttger (Kamatokogiro).
2. *C. helgendorfi* v. Martens (Chinsinji).
3. *C. sericina* (新種並にその變種 *minor*, Chinsinji 及 Yumagaaisi).
4. *C. fusangensis* (新種 Chinsinji).
5. *C. rectaluna* (新種 Kamatokogiro).

6. *C. micropus* (新種 Chinsinj.)

7. *C. subulina* (新種 Chinsinj.)

以上の如くであるが特に注意を要するのは產地である。之等は採集者から記載者へ送つた筆記による地名の讀み誤りでチンシンジは中禪寺ユマガアイシは馬返に相違なく、採集者も地方訛りの聞き違を記録した點が多いであらうことは充分察することが出来るが茲に厄介なのは、「カマトコギロ」の地名であつて全く見當がつかない。そのような譯で、日光に含滿の淵と云ふのがあり、また久次良と云ふ所もある所から之等がこんがらがつて此の様な地名が出来たのではなからうかとさへ考へられるが元より極端な憶測に過ぎない。さて上記 Möllendorff の記した諸種について後々の考證に従つて次のやうな訂正が必要となつて来る。その中一、三、六、七は先づよゝとして第二 *higendorff* は出雲の原産で此の種はナミギセルの大形亞種と認められ而かもその原品は略ぼ偶發的畸形標本であつ

たらうと信じられて居るもので、日光産のかく同定せられた貝は此の名のものではなく寧ろ模式的なナミギセルで殊に光澤の強い帶紫褐色の美麗な地方型であることは後の採集によつて明かである。第四は「日本」の詩稱「扶桑」を支那音 *Fusang* によつて命名したものであるが本種は既に *platycarthen* v. *Martens* の名で知られて居るものである。第五は和名ヒカリギセルと同一であるか又はその變種に外ならないであらうと云はれて居る。ヒカリギセルは嘗て *happetolia* v. *Martens* と云ふ名で知られて居たが今日では更に古名である *buschi* Krüster が用ひられることになつて居る。その外に中禪寺から *aptychia* と云ふ變種も報告せられて居る。その次は

四、一八八三年 Reinhardt によつて再び Sitz. Ber. Ges. naturf. Freunde Berlin 八二頁以下に Hungerford 採集のムツカフマイマイ類の記述がある。日光産としては次の如くで

ある。1. 再び *Hyalina sinapidium*; 2. *Conulus pustulina* (爰では馬返ち Umagatchi と名けて居る)。3. *Conulus phyllophilus* A. Adams; 4. *Conulus labilis* (?) Gould; 5. *Conulus stenogyrus* A. Adams 凡て産地は馬返並に日光と記されて居る。以上の内で第二は京都にも産するとあつて掲げられた圖から判断すると今日ハリマキビ *Kaliella harimensis* Pilsbry と稱するものに近似して居る。第三から第五は凡て先進學者の種に同定せられて居るがその正しさについては次の如き理由によつて甚だ危ぶまざるを得ない。即ち第三はアダムスが Mosecki (門司) で採集した貝で、第四は函館原産であり、第五は對馬原産であるが神戸からも産するとせられて居る。之等の諸種が日光からは産し得ないとは斷言出来ないがその何れもの種が記載上多分に明瞭を缺く點がある。恐らく全部が *Kaliella* に屬するものであらうが第四はオホタキキビ *K. nicomus* Pilsbry et

Hirase に第五はカサキキビ *K. crenulata* Gude に稍々似たものと見ることが出来る。その次は五、再び Mallendorff が一八八五年 Jour. Asiatic Soc. Bengal, 54 (2), No. 1. に John Anderson (一八八四年) F. W. Eastlake 等によつて採集せられたものを記述して居るがその中日光地方のものとして次のものがある。

1. *Opeas pyrgula* (日光); 2. *Clausilia nikkoensis* (新種、日光、イーストレーキ) 此の貝はヒクキセル *Stereophaedusa brevior* に比較して大形且つ狭長であると記されて居る。それから此所でキセルガヒ類中に新しい一群が創設せられ「*C. sublanellata* 群」と稱し新種なる 3. *Clausilia sublanellata* と 4. *C. opeas* の二種が編入せられた。その外の種類では 5. *Clausilia plicilabris* A. Adams; 6. *Linnæa japonica* (中禪寺湖); 7. *Algaeus nipponensis* Reinhardt; 8. *Helicina japonica* A. Adams の八種であるが第四の貝は上記第三項の第六と

第七との中間的の特徴を有するもの、如く讀まれるもので、察するところその何れかの變異に外ならないでは無からうか。第五は紀伊田邊原産で極めて特色のある貝で他地方から産するとは考へられない。之は要するにシリオレギセル *Tyrannophadusa bilabrata* (Smith) か或はウスマニギセル *T. aurantiaca* (Boettger) の何れかに似たものを斯く同定したものであらう。第七は Donitz が東京で採集した種類でムシオヒガヒの一種である。此の種は箱根からも採集したと記されて居るが、その實體が今日まで明瞭にされて居ない。要するに記載上の不完全が因となつて取り残された一種で、今日のビルスマシオヒ *Chamaelycaeus pilsbryi* (Kobelt) に當るものにも感ぜられるものである。

以上は外國人による採集の歴史の概略であるがその外飯島教授は動物學雜誌第四卷二七三頁にオホケマイマイ *Aegista vulgivaqa* (Schmacker et Böttger) を、また同誌第五卷二八

頁にはクチマガリマイマイ *Ceolorus cannicollis* Pilsbry の採集のことが報ぜられてあるが前者はその亞種 *parvosa* Pilsbry に近いもの、後者は何かの誤りであらう。而して日光の貝類界は先年岡田教授の採集が行はれるに至るまで全く永い眠を恣にして居たものである。

日光に於ける私の採集 前に述べた如く私は昨昭和八年八月いよいよ日光の陸産貝類實地採集の便宜を得て勇躍同日夜京都を出發して途中三ヶ所へ寄り道をなし、九日東京を出發してその日の午後三時半に日光驛に下車し、乗合自動車に揺られながら中禪寺湖畔中宮祠まで行つて乗り替へるために下車したが恰も烈しい雷雨に見舞はれ待合室の一隅に立ちすくんだ形であつた。そして五時半に漸く菖蒲原の丁田屋と云ふ宿へ落ち付いた。さすがに涼しさ身に迫るのを覺えた。

十日は早朝から男體山の麓を縫つて幸湖の北東湖畔を採集した。大樹は天を摩するばかりに

聳え立ち晝猶ほ暗く、雨露の潤ひまた申し分なき上に腐朽の倒木も彼方此方に見受けられ陸貝採集には絶好の山相を現はして居るにも拘はらず山高きに過ぎるが一因かまた他の理由による

するに足るものはバツラマイマイに極めて近似する一種未名の *Aegista* 數個を發見したことであつた。

ものか極めて寡産である。さきにも述べた如く斯程多種が單なる觀光旅人によつてさへ採集し得られたものが何故容易にその姿を現はさないのか解するに苦しむ譯であつた。それでも唯無暗に次の瞬間にこそ偶然的機會が迫つて居るのではなからうかと、ともすると弱らんとする力を勵まして探し廻はつて遂に歌ヶ濱の立木觀音の堂宇の附近にまで進んだ。斯くても得るところ極めて少くナミギセル・ツムガタモドキギセル・“*Clausilia*” *subulina* (?) 等の外一個の老い朽たキセルガヒ “*C.*” *sublanellata* を得た。之等キセルガヒの外にはトバマイマイに似た左巻蝸牛・オホコハクガヒ・ヲカチャウジガヒ・バツラマイマイ・左巻蝸牛の卵より孵化した許りの幼殻の一團等を採集したが爰に最も有意義と

十一月は明智平から馬返へのケーブルカーに依つて下山し、清瀧の近くから本道に別れて北西へ歩を進め裏見の瀧へ行つた。昨日は一三〇

〇米程度の高位置を探つたが收穫が思はしくなかつたので今日は一つ低位置をと目指したのである。裏見の瀧は約八〇〇米の位置にあるが途々は樹木も若く山相は貝類採集には全く不向であつたが瀧附近に指しかゝると茂りも相當となり朽木等もあつて稍や多數にナミギセル・ツムガタモドキギセル等を得たが爰で計らずも一個の大形ベツカフマイマイの一種 *Petalochlamys septentrionalis* を得たのは實に嬉しかつたがその第二が續かなかつた。それから引き返して東照宮の附近の山々又境内の巨木の間等を探し廻つて、境内ではヒタチマイマイ・ニツポンマイマイ等を若干得た。

十二日、今日は中禪寺湖と日光探勝のために費し、東照宮境内の更に他の場所を探し大樹の腐幹からツムガタモドキギセル若干を得た。通例斯の如き年経りたる大社寺の境内には貝類採集には詭へ向きの塵芥捨て場等があるものであるが東照宮を始めその附近は掃除がよく行き届いて獲物の棲所は残されて居ないのを認めた。今晚から宿を日光驛前へ移した。

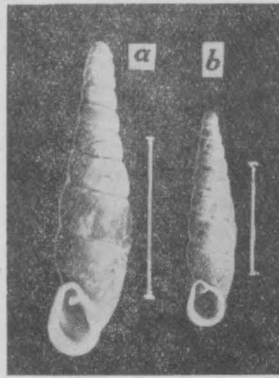
十三日、今日は日光町の眞北に當る霧降の瀧附近を探るために出發した。バスに便乗したが行く途々は若木ばかりの山又は畠地等で採集を行ふ術もない。車から降されても一望唯柘かれたる土地で瀧の音も聞えず樹木も見えないので甚しく不安にかられたのであるが、示された道を取つて僅か進んで丘上に登れば眼界忽ち一變して遙か下方豁間に數段の懸瀑を認め、またその谷間には相當の樹木も繁茂して居るのに胸を撫下した。斯くて別天地の感ある霧降の瀧を廻る急傾斜面に茂る樹間を縫つて只管採集に

邁進した。爰で私はナミギセル・ツムガタモドキギセルの相當多數と "*Chausinia? subhumerata* の新鮮な標本(挿畫に示したもの)一個と小形ギセル貝數個を手に入れた。そしてその後の二者を少し多數に採りたいと懸命になつて見たが遂にその望は達せられなかつたが若干の他の蝸牛類を得て一旦町へ歸り、次は南の方面を探して見ようと含滿の淵に出でて素麵瀧のある方角へ立ち入つた。此の方面の山は概して淺く、木々も若くあつたが或る杉林の中では微小貝を數多く採集して夕刻雷雨に逐はれながら宿に歸り旅裝を改め、夕暗迫る頃日光驛を發車し盛なる雷雨に見送られて宇都宮を経て東京へ戻り新宿驛で乗り替へ中央線の涼しい夜行列車で翌午前八時木曾福島に下車。附近の山々に二日間收獲の少い、果ては氣まづい採集を行つて歸落したのであつた。昭和八年は私にとつては何れの採集旅行も即ち福井縣でも此の旅行でも不漁續きであつたことは是非ないことであるが淋しいもの



であつた。

要するに日光の貝類の寡いことは必ずしも今に始まらぬことであるが如く、各著者の報告に見ても材料は一個とか二個とかを見たか記してあるに鑑み更に回を重ね熱心な採集を行つてこ



a. *Hemiphaedusa subblunellata* (Mlldff) 霧降瀧  
b. *H. subulina* (Mlldff) 歌ヶ濱

そ爰に先人の擧げ得た各種に遭遇する機會が與へられるのであらう。尤も火山地方と云ひまた近來山の整理が行き届く様になるにつれ漸次貝類の棲息によい條件を供しなくなる傾向のあることはまた明かなことではあるが。

日光産貝類目録 爰に既記の種類に私の獲た

ものを加へて日光産貝類の目録を編んで筆を擱くこととする。表中※記號のものは私も採集し得たものであり、◎記號のものは日光産として爰に始めて加へ得たものである。

前總類 (古腹足類)

*Waldemaria japonica* (A. Adams) ナマキサガ

中禪寺

(中腹足類)

◎ *Palaina (Adelopoma) pusilla* (v. Martens) ヒダリ

ナマキサガヒ 日光素懸瀧

*Chamaelycaeus nipponensis* (Reinhardt) (ベルヌス

シオセ?) 日光

◎ *Cyathopoma (Nakadaella) mieron* (Pilsbry) ミヂソ

ナマタニシ 日光素懸瀧

有肺類

※ *Hemiphaedusa platygauchen* (v. Martens) ツムガ

タモトキギセル 菖瀧、歌ヶ濱、裏見瀧、東照宮、霧降瀧

*Hemiphaedusa sericina* (v. Moellendorff) ナガギセル

(+ var. *minor* (v. Moellendorff) 中禪寺、馬返

※ *Hemiphaedusa subblunellata* (v. Moellendorff) (挿圖A)

幸湖北畔、霧降瀧、日光

※? *Hemiphaedusa opeas* (v. Moellendorff) 日光

*Hemiphaedusa micropeas* (v. Moellendorf) ヒメキセル 中禪寺, 日光

※ *Hemiphaedusa subulina* (v. Moellendorf) (狹尾b) 歌ヶ濱, 霧降瀧, 中禪寺, 日光

※ *“*Clausilia phacelabris*”* Moellendorf 日光  
*Phaedusa* (*Stereophaedusa*) *japonica* (Grosse) ナミキセル 菖蒲, 歌ヶ濱, 真見瀧, 霧降瀧

*Phaedusa* (*Stereophaedusa*) *nikoensis* (v. Moellendorf) 日光

*Phaedusa* (*Euphaedusa*) *tau* (Boettger) ナミキセル (日光?)

*Phaedusa* (*Euphaedusa*) *digonoptica* (Boettger) ノホタキキセル カマトコギロ

*Zaphra* (*Zaphrychopsis*) *buschii* (Küster) ヒカリギセル (+ var. *rectimana* (v. Moellendorf) カマトコギロ, 日光

(+ var. *aptychia* (v. Moellendorf) 中禪寺  
*Opaeus pyrgula* Schmacker et Boettger ホソヲカチヤウジガヒ 日光

◎ *Opaeus clauulimanus kyotoense* Pilsbry et Hirase  
ヲカチヤウジガヒ 菖蒲

◎ *Gongodiscus pauper* (Gould) パツラライイイ 菖蒲, 歌ヶ濱

日光貝類探集記

◎ *Orgethus* (?) *gessensis* (Reinhardt) ノホコハツカヒ 菖蒲

*Phaiongeus bivenatus* Benson ナメクチ 日光  
*Kaliella phylophilia* (A. Adams) 馬返

*Kaliella pustulina* (Reinhardt) 馬返, 日光  
*Kaliella stenogyrus* (A. Adams) 馬返

*Kaliella labilis* (?) (Gould) 馬返  
*Kaliella crenulata* Gude カサキビ 素麴瀧

◎ *Kaliella rudis* Pilsbry スヂキビ 歌ヶ濱  
◎ *Kaliella harimensis* Pilsbry ムリキビ 歌ヶ濱

※ *Discoconulus sinapiatum* (Reinhardt) ヒメベツツカ  
ツガヒ 日光, 馬返

◎ *Discoconulus halgendorfii* (Reinhardt) (ヤクヒスベツツカ?) 素麴瀧

◎ *“*Macrocyclamys*”* sp. (多少 *habu-sananus* Hirase に似るも小形) 素麴瀧

※ *Petalochlamys septentrionalis* (Ehrmann) 真見瀧, 霧降瀧, 日光

◎ *Ganesella japonica* (Pfeiffer) ニツボンライイイ (模式的) 東照宮

◎ *Aegista nikkoensis* Kuroda (新種) 歌ヶ濱  
◎ *Aegista minima goniosoma* (Pilsbry et Hirase) カマコキホベツライイイ 霧降瀧

※ *Agrostis (Plectotropyis) vulgivauga panrosa* (Pilsbry)

オケウケ  
オケウケ (= ? 霧降瀧)

東照宮, 日光

◎ *Euhadra guaxesta tobai* (?) S. Hirase (トバウチ)

※ *Euhadra (pelionphala) brandti* (Kobelt) ヒカチ

トバウチ (= ? *nimbosa* Martens, non Crossé)

トバウチ (?) 舊瀧, 霧降瀧

# 北滿洲平野の瞥見

上 治 寅 次 郎

## 一

本年の夏、滿洲産業建設學徒研究團に参加して約一ヶ月に亘り滿洲國各地を巡檢した。急ぎの旅行であつて、勿論、落ち着いた探究は望み得なかつたが、研究團本部の周到なる準備によつて、日程は滞りなく進行し、各地に於て、官吏・軍官・専門家・技術家等の講話、實地指導座談會等の催もあり、自由研究の機會も屢々あつて短時日の旅行としては、相當有益に見聞することが出來た。

殊に筆者にとりては北滿洲鐵道以北の北滿の大廣野地帯、即ち、齊北線（齊々哈爾・北安鎮間）濱北線（濱江・北安鎮間）黑北線（北安鎮大黑河間・北安鎮二站間は線路完成、他は工事中）等の沿線の旅行に得る處が多かつた。其の他、南滿各地の外に、平齊線（四平街・齊々哈爾間）拉濱線（濱江・拉法間）鄭大線（鄭家屯・大虎山間）等の沿線の狀況も視察することを得たので北滿と南滿とを比較することも出來て、南北滿洲が地方的色彩の上に差異を示す點も知